

“鎌倉楽しむ会”
“令和4年秋本番”

谷津バラ園～船橋大神宮～

中山法華経寺の散策

- ◆ 開催日 : 令和4年10月29日(土)
- ◆ 集合場所 : 京成谷津駅改札口
- ◆ 集合時間 : 午前10時00分
- ◆ 解散時間 : 午後3時30分(中山法華経寺)
- ◆ 参加費 : 500円(資料代、保険料含む)
- ◆ 飲食費・交通費・拝観料などは個人負担

京成谷津駅／読売巨人軍発祥の地／谷津公園／谷津バラ園／伊藤新田跡
／谷津の干潟／昼食(商店街で自由)／京成谷津駅乗車／大神宮下駅降車
／船橋大神宮／海老川(船橋名発祥の川)／旧成田街道商店街の散策
／京成船橋駅乗車／京成中山駅降車／中山法華経寺／京成中山駅(解散)

1, 読売巨人軍発祥の地



- * 京成本線谷津駅から南へ 500mほど歩いた谷津公園。谷津バラ園の入口右手に「読売巨人軍発祥の地」碑があり、川上哲治、長嶋茂雄、王卓治など有名な巨人軍の手形が並んでいます。
- * 昭和9年(1934)11月2日、ベーブルース、ルー・ゲーリック、ジミー・フォックスの三大本塁打王に、速球王のフレディ・ゴメスら超一流選手を含む全アメリカ選抜チーム(MLB選抜)が来日。
- * 11月4日の神宮球場での第一戦を皮切りに、全国12都市で16試合を戦いました(結果は日本の16戦全敗)。
- * ベーブルース一行を招いたのは、読売新聞社社長・正力松太郎氏でした。
- * 対戦した全日本チームは、水原茂(慶応義塾)、中島治康(早稲田)、二出川延明(明治)、井野川利春(明治)、苅田久徳(法政)ら六大学の選抜に沢村栄治などを加えた急造編成チームでした。
- * その全日本チームが母体となって大日本野球倶楽部(後に東京読売巨人軍、さらに読売巨人軍と改名)が誕生。全日本チームの合同練習、そして練習試合が行われたのが谷津遊園内の谷津球場だったのです。

2, 谷津公園



- * 谷津公園はバラ園に隣接している公園です。公園としての敷地も広く、また谷津干潟にも隣接しているため、いろいろな自然にふれることができる公園です。遊具は少ないため近隣の子供達でエリアは込み合う感じがしますが、バラ園に関連して駐車場やトイレなどの施設が整っています。
- * 花木の広場では、桜が多く植えられており、桜の季節にはお花見で楽しむ人も多いみたいです。
- * また、谷津干潟を望める芝生の広場もあり、バラ園の賑わう季節には臨時駐車場にもなります。

3, 谷津バラ園

- * 谷津バラ園は、昭和32年（1957）に京成電鉄の谷津遊園のバラ園として設立され、昭和63年（1988）習志野市の経営となりました。
- * 約 12,600 m²の敷地内には 800 種、7500 株のバラが噴水を中心に整然と咲き誇り、植栽されているバラは、名花：名品種と呼ばれるものや、原種及び歴史的にも優れた価値を持つ品種が多くあります。
- * 園内には 50m のバラのトンネルもありロマンチックな雰囲気があります。
- * 庭園内には「皇室・王室コーナー」や「鈴木省三コーナー」「イングリッシュローズコーナー」「有名人コーナー」「世界のバラコンテスト受賞コーナー」「香りの庭」といったテーマ別の区画も設けられています。
- * 「皇室・王室コーナー」では「モナコ王室コーナー」、「オランダ王室コーナー」といったように、さらにそれぞれの王室に因んだバラを集めた区画が設けられています。
- * 「鈴木省三コーナー」というのは、日本におけるバラの育種で多大な功績を残した鈴木省三氏の功績を顕彰する目的で名付けられたコーナーです。



（習志野市ホームページより）

4, 伊藤新田の跡

- * 明治の中頃から大正時代はじめの間に、製塩のための塩田がありました。津田沼村の村長だった伊藤彌一氏が中心として開発しました。
- * この塩田は「入浜式塩田」という種類で、堤防を築いて外部の海と区切り、堤防内に海水を取り入



れて砂浜に散布し、天日によって水分を蒸発させて濃縮し、さらに釜に入れて煮詰めるという製造方法でした。

- * この方式は行徳から谷津にかけての海岸で盛んに行われていました。しかし、明治 44 年（1910）の暴風雨によって生産不能となり、さらに大正 6 年（1917）には大暴風雨と高潮に襲われ、復興不能となり、閉鎖され、大正 14 年（1925）京成電鉄がこの地を買収し、谷津海岸遊園（のち谷津遊園）を開設していきました。

5、谷津干潟



- * 谷津干潟は東京湾の最奥部に位置する広大な干潟の一部でした。干潟では製塩や採貝などが行われ、谷津遊園による観光やレクリエーションの場として多くの人々に親しまれていました。
- * 昭和 46 年（1971）から現在の谷津干潟の周囲に広がる干潟の埋め立てが始まりました。長方形に残された干潟は、昭和 49 年頃より「谷津干潟」と呼ばれるようになり、市民による「干潟の保護運動」が始まりました。

- * 谷津干潟の広さは約 40 ヘクタールです。
- * 水鳥をはじめ、ゴカイ、貝、カニ、プランクトンなどたくさんの生き物が潮の満ち引きに合わせてくらししており、国指定鳥獣保護区になっています。
- * また、シベリアやアラスカなど北の国と東南アジア、オーストラリアなどの南の国を行き来する「シギ、チドリ類」にとって、渡りの途中の栄養補給と休息をとるための中継地として重要な役割を果たしていることから、平成 5 年（1993）6 月 10 日に日本国内の干潟として、初めて「ラムサール登録湿地」に認定されました。
- * さらに、平成 8 年（1996）には水鳥の保全を目的とする「東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ」に参加しました。
- * 谷津干潟は、子育てのために渡ってくる夏鳥、越冬のために渡ってくる冬鳥。そして春と秋の渡る途中に立ち寄る旅鳥と、四季を通して多くの野鳥と出会えます。
- * 一年間に谷津干潟の周辺で確認される野鳥の種類は 110 種以上で、そのうち水辺の鳥は約 70 種です。

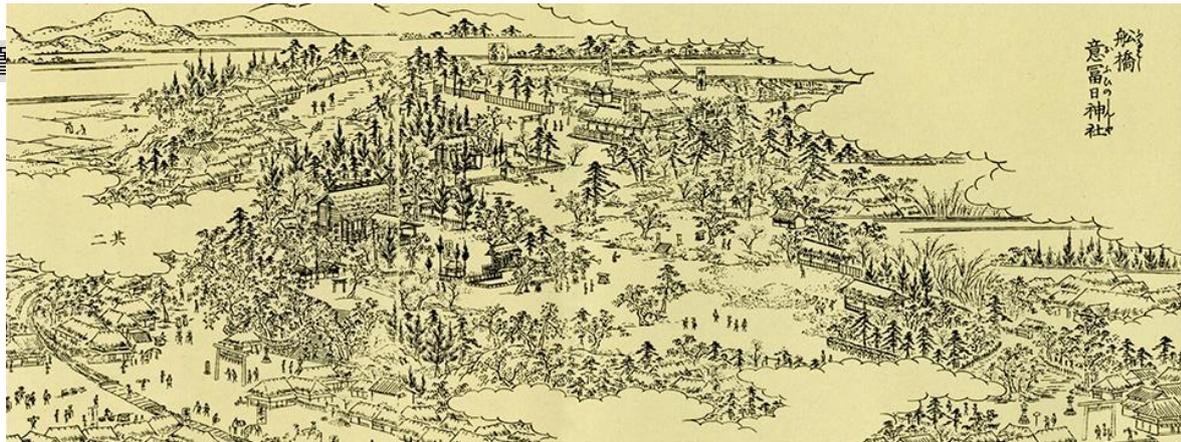
（谷津干潟自然観察センターHP より）

6、谷津商店街

- * 谷津商店街は、過って谷津遊園が盛んだっころの面影を残す商店街。美味しいお店、また、オシャレな右画像のコーヒー店「蛍明舎」なども飲食には楽しい処と思います。



7, 船橋大神宮

* 「 船橋大神宮（意富比神社）の沿革 」

- * 第12代景行天皇40年の御代、日本武尊が東国平定の折、当地にて平定成就と干天に苦しんでいた住民のために天照大御神を祀り祈願されたところ、御神徳の顕現があったということです。これが意富比神社の創始とされています。
- * 平安時代、延長5年（927）に編纂が完成した『延喜式』にも当宮が記載されており、式内社としての歴史を知ることができます。
- * 後冷泉天皇の御世、天喜年間（1053～1058）には、源頼義・義家親子が当宮を修造し、近衛天皇の御世、仁平年間（1151～54）には、船橋六郷の地に御寄附の院宣を賜り源義朝が之を奉じて当宮を再建し、その文書には「船橋伊勢大神宮とあります。
- * 鎌倉時代、日蓮大聖人（1222～82）は、宗旨の興隆発展成就の断食祈願を当宮にて修め、曼荼羅本尊と剣を献納されました。
- * 江戸開府の頃、徳川家康公（1546～1616）は当宮に社領を寄進、奉行をして本殿、摂社、末社等を造営し、爾来江戸時代を通して五十石の朱印状が下されました。
- * 近代に入り、明治天皇（1852～1912）には、習志野三里塚へ行幸の都度、勅使を以って幣帛料を御奉奠なされています。
- * 船橋大神宮は、本式には意富比神社（おおいじんじゃ）といいます。初出の文献は、平安中期の「日本三代実録」貞観5年（863）の記事で、「下総国意富比神」とあります。これは、船橋市域に関する文献としては最古のものです。
- * また、平安中期の格式ある神社を記した「延喜式」の「神名帳」（じんみょうちよう）にも、下総国11社の中に「意富比神社」として載せられ、東国では数少ない「式内社」でありました。
- * 往時の諸社殿の景観は、江戸時代末期の{江戸名所図会}に載っていますが、明治維新の戦火のため焼失してしまいました。その後、明治6年（1873）本殿が造営され、大正、昭和にかけて整備され往時の姿に復活しています。

* 灯明台



- * 過って、船橋沿岸を航行する船は、意富比神社（船橋大神宮）の境内にあった常夜灯を目印にしていた。
- * この灯明台は慶応4年（1868）の戊辰戦争の時、社殿とともに焼失してしまいました。
- * 明治13年（1880）に現在の灯明台に再建され、明治28年（1895）に停止するまでの間、政府公認の私設灯台として活躍しました。
- * 標高27mの台地にあり、浅間神社のあった場所に建てられたので、「浅間山灯明台」と言いました。建築様式は和洋折衷の「擬洋風建築」で、1階・2階は和風、3階の灯室が西洋式灯台の意匠を取り入れた六角形の造りになっています。

* 常盤神社



* 常盤神社

御祭神は 日本武尊、徳川家康、徳川秀忠の三柱です。

御由緒によると、秀忠公が家康公の前歯をお祀りし勧請し、三代将軍家光公が秀忠公の像をお祀りしました。また、家康公が意富比神社に奉納した、日本武尊の像や、徳川四天王として知られる、井伊直政、榊原康政、本多忠勝、酒井忠次の像もお祀りされています。

- * 八代将軍徳川吉宗は、『当宮は格別めでたき御宮』と称賛され「伊勢日光参拝いたし候も同じ」と申されたと伝わります。

- * 江戸名所図会によると、天海大僧正により勧請され、東照大権現宮（徳川家康）の御神影、2代将軍秀忠公木像、日本武尊の神像と記載されています。
- * 社殿は美しく、紅葉の季節にはコラボレーションした情景がすばらしく、参拝者を楽しませてくれると思います。船橋大神宮の境内社の「常盤神社」は江戸時代から深く信仰され、多くの人々が訪れた名所でもあるということです。

* 境内社は24社

- * 境内社の一つ、右の画像は「船玉神社」です。舟の形をもった珍しいお社です。
- * その他にも摂社が素晴らしく祀られています。



8、船橋の地名伝説



- * 小高い丘地に広がる船橋大神宮の階段を降り「成田街道」に入りますと「海老川」が流れています。この橋の中央に船橋の地名の伝説がモニュメントとしてあります。
- * 伝説では、日本武尊が東征の折、川を渡るために舟で橋を造った。そのような舟で造られた橋の事を「船橋」ということから「船橋」となった、というのが最も有力な説である。
- * 海老川はかつては、現在よりも水量、川幅があったとされ、現在は陸地であるが、夏見干潟と呼ばれる大きな入り江があり、湊として栄えていたという。
- * 船橋という地名が世間で用いられるようになったのは鎌倉時代とされており、鎌倉時代の歴史書「吾妻鏡」に「船橋」という地名がでてくる。と書かれています。

9、成田街道



* 成田街道の由来は佐倉道である。佐倉道は房総最大の佐倉藩で、老中の輩出する、江戸時代初期の土井利勝が築城し、後に大老に就任する藩の参勤交代に利用された主要な街道であります。

* 天慶3年(940)平将門の乱の平定祈願のため。京から寛朝大僧正が不動明王を祀り、成田の地に祈願寺を創建した。

* 時代は下って、江戸は元禄時代(1700年頃)から、庶民も力をつけてきて、町人文化の華が咲くようになって、三泊四日の成田山新勝寺詣でが盛んになってきた。佐倉道は自然と成田街道と呼ばれるようになってきた。

* 最も手軽な旅であったのか、幕末には、年間200万人が参詣に訪れていたということです。また、子供に恵まれなかった初代市川團十郎が、熱心に信仰し、その信仰のお陰か、男子誕生となった。こんなことも成田参詣が一層盛んになっていった。そのため船橋宿も繁盛していたのです。往時を偲ばせる建物がビルの谷間に残っています。



10, 中山法華経寺



- * 中山法華経寺は鎌倉時代の文応元年（1260）の創立。山号は正中山。日蓮の説法と安息の地であり、境内に奉る鬼子母神も広く信仰を集めている。
- * 日蓮は、その布教活動の中で幾度となく迫害を受けたが、その際、千葉氏に仕えていた富木常忍や太田乗明が管轄していた八幡荘に日蓮を迎え入れ保護した。
- * 特に千葉氏の被官であった富木常忍は日蓮のため若宮の自邸に法華堂を造営し、安息の場を提供するとともに、文吏であったため紙筆を提供してその執筆を助けた。当時の多くの日蓮の遺文が残されているのはその縁と言われている。
- * 弘安5年（1282）に日蓮が没した後、常忍は出家し自邸の法華堂を法花寺と改め、初代住持・常修院日常となり、日蓮の有力な檀越であった太田乗明の子・日高は、父の屋敷を本妙寺として2代目住持となった。
- * そして、八幡荘の領主である千葉胤貞の帰依を受け、胤貞の猶子の日祐を3代目住持とした。日祐は室町幕府との関係を深め、ここを拠点とする中山門流を成立させていった。
- * 天文14年（1545）古河公方足利晴氏より「諸法華宗之頂上」という称号が贈られ「法華経寺」という「寺号」が誕生し、法花寺と本妙寺の両寺を合わせた一つの寺院となった。



* 法華経寺の五重塔は、本阿弥光悦に始まる美術工芸や刀剣鑑定の名家である、本阿弥家10代光室（1583-1625）が父・光徳の三回忌と母・妙光の五回忌にあたる天和8年（1622）、加賀藩主・前田利光の援助を受けて建てたものです。総高 31.6m です。
国指定重要文化財

＊ 荒行堂 ＊



- ＊ 毎年11月1日から翌年2月10日までの100日間、日蓮宗大荒行堂が開設されます。その修行は全国から約100名の僧侶が挑戦します。全ての日蓮宗の僧侶に課せられる修行ではなく、秘法を身につけたいと自らが志して挑戦するものです。
- ＊ 荒行堂では、毎朝2時起床、寒水に身を清める水行を一日7回行い、お堂の中では、ひたすら、お経の読誦と写経を続けます。
- ＊ 麻の清浄衣（死に装束）を着用し、足袋をはくことは許されず、常に素足で修行します。
- ＊ 食事は朝夕二度の白がゆ。家族や友人との連絡をとることも許されず、もちろんテレビや新聞からの情報を得ることもできません。
- ＊ 寒さと飢えと睡魔に耐えながら、外界から完全に遮断された環境で、ひたすら修行することによって、力を習得するのです。
- ＊ 尊い身となる2月10日の成満の日は、入行時に閉ざされた瑞門が100日ぶりに開かれ、全国から集まった出迎への檀信徒が早朝より修行僧を待ち受けます。
- ＊ 続いて祖師堂で「大荒行成満会」が行われます。



祖師堂
国指定重要文化財



鬼子母神堂

* 中山法華経寺事件 *



- * 現在の東大赤門は、江戸時代の徳川11代将軍・家斉公の21女「溶姫」が、加賀百万石12代藩主・前田斉康に輿入れの時、本郷の加賀藩上屋敷の溶姫御殿の正門として造られたものです。
- * 家斉公の将軍在位は50年に及び少しずつ外国の船が日本国沿岸に現れるようになってきました。大奥は雅に幕政の財政を蝕むように力をつけ、老中も立ち入ることができない状態になっていました。一方庶民の中からは文化の華が咲き誇り時代の流れが革新されていく激動の兆しが見える頃になってきました。

- * 以上のような時代背景の中で、中山法華経寺事件というものが起こります。
- * 事の発端は、中山法華経寺の支院・「知泉院」の住持・日啓の権力欲が始まりです。日啓には誉れ高い美人の「於美代」という娘がおりました。日啓は何時の頃からか、中山法華経寺の支院・知泉院を将軍家の祈願寺にしてもらうよう画策を始めます。将軍家斉公の側近・旗本・中野清茂に近づきます。そして、娘・於美代を養女に仕立て、大奥入りを目論見、家斉公の側室を狙います。
- * 於美代の美貌のためか、将軍家斉公のお目に留まり、側室となりました。父・日啓の念願が叶い、次には幕府の祈願所を狙います。於美代は協力し家斉公に寝所で、「おねだり」します。しかし、ここは江戸幕府の当初から、芝の増上寺・上野の寛永寺が祈願所として権勢を張り、寺格の低い知泉院は叶わず、中山法華経寺がその座に就き、知泉院は「御用取次」ということになりました。
- * 日啓は、ますます於美代とタッグを組み、今度は雑司ヶ谷に感応寺を建立させました。そして、権威を上げるため、大奥から御年寄、御中臈といった上級女中の参詣をさせるようにしました。そして、彼女たちの饗応には若い僧侶をあてがった。江戸から7里（約28km）の知泉院も同様なもてなしを行い、大奥では密かに評判になっていった。
- * 天保8年（1837）将軍家斉は亡くなります。これを待っていましたと寺社奉行・阿倍正弘は日啓を遠島の罪、関係者を捕縛し、一件落着するが、大奥の権力には手を出せず、お咎めなし、於美代は家斉公を弔い二の丸御殿で余生を静かに送ったという。もう一つの説は本郷・無縁坂の講安寺で余生を静かに送ったという説もあります。



山
門

伊東忠太先生設計
聖教殿

